



貝原守一医学振興財団会報

第14号



KAIBARA MORIKAZU MEDICAL SCIENCE PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団

会報 第14号

目 次

- 巻頭言 P 1
「医学研究の自由と責任」
財団理事 橋場 邦武（長崎大学名誉教授）
- 平成 21 年度 研究助成金贈呈式記念写真 P 2
- 平成 21 年度 研究助成金贈呈式の挨拶 P 3
理 事 長 佐伯 清美
- 平成 21 年度の研究助成候補者の選考について P 4
選考委員・天児 和暢（理事 九州大学名誉教授）
- 研究論文選考にあたって P 6
「研究助成の御受賞を祝して」
選考委員・橋場 邦武（理事 長崎大学名誉教授）
「助成選考にあたって」
選考委員・小野 順子（福岡大学名誉教授）
- 平成 21 年度助成金贈呈者一覧 P 8
- 平成 21 年度助成受賞者の論文抄録 P 9
江上 拓哉氏（九州大学大学院医学研究院）
大川 恭行氏（九州大学医学研究院）
伊藤 浩司氏（九州大学大学院医学研究院）
- 貝原守一賞受賞者 P 12
松田 史子氏（山口大学大学院医学系研究科）
野本 摩利氏（産業医科大学 微生物）
- 財団の 21 年度行事 P 13
- 一般財団法人へ移行について P 15
結城 慎也（専務理事）
- 貝原守一遺稿より「戦争と医学」 P 16
- 法人名変更のお知らせ P 17

～ 巻頭言 ～



「医学研究の自由と責任」

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

公益法人制度の改革に伴い、貝原守一医学振興財団の法人としての組織や運営も変化することになり、これに伴う諸手続きの結果として、本財団の機能的な自由度が増すことになった。財団の最も重要な活動である研究助成も、財団発足当初のような活気が次第に復活して行くことも期待できて、関係者の一人として喜ばしく感じている。自由と責任とは常に表裏をなすものであるから、財団としての活動に伴う種々の責任も増すように思われる。

本財団からは貝原先生の立派な遺稿集として「医学と科学精神」が既に発行されているが、それとは別に、毎年発行される本財団会報の巻末には、貝原先生の九大新聞などへの寄稿が「遺稿より」として掲載されていて、先生の医学研究者としての優れたお考えを残す貴重な資料となっている。折々にそれを拝見すると、研究に対する厳しさとともに、今日にも通じる新しいアイデアや提言に心を打たれることも多い。

昭和12年にお書きになった記事には、医学研究が博士号獲得を唯一の目的としてなされる場合も多く、その一番の弊害は、研究の結果が予想されてしまっていることであると批判され、予期されない結果が出た場合の意義の重要性を示唆しておられる。相互批判の必要も説いておられ、研究者を国内の研究室間で積極的に交換することや、さらには学生が他学部あるいは他大学の講義を聴講できることも考慮さるべき、と述べてもおられる。また、細菌の近代戦の武器としての利用に言及されたらしい現実的な文章も見られ、臨床への深い関心も持っておられたようである。

或る国立大学の学長が新入生への告辞のなかで、研究第一、門戸開放、実学尊重、と説かれたと聞いたことがあるが、学問の道、教育の道に古今東西のないことを、戦時中の二十才代後半の先生の精神に教えられることはまことに素晴らしいことと感じる。財団の医学振興事業から、貝原守一先生の今日なお新しい精神に適うような、新しい時代の若い研究者が育っていくことを願いたいと思う。



平成22年2月13日（福岡ガーデンパレスホテル）

平成21年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式



平成21年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶

一般財団法人貝原守一医学振興財団 理事長 佐伯 清美



本日平成21年度貝原守一医学振興財団の研究助成金贈呈式に、受賞者の皆様、財団役職の皆様には、公私ご多忙の中ご出席下さいまして、式を開催することが出来ます事を篤くお礼申し上げます。

今回17名の論文応募者の中から見事に選ばれました三名の受賞者の皆様、受賞おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

平成4年より始まりました本財団の研究助成金贈呈者は本年度で、72名になりました。

この18年間に亘る72名の受賞者の秀れた研究が、日本の医学の進歩発展に大きく貢献していることを確信いたしております。

本財団の設立目的であります「研究助成金授与により医学の発展に寄与し、以って社会の福祉に貢献する」という目的を立派に達成しているものと信じ誇りに思っております。

本日助成金をお受けになられる三名の皆様も、助成金を有効に役立てていただき、立派な研究の成果をお挙げになられることを希望しお願い申し上げます。

なお、数多い応募論文の中から、毎年公平厳正に優秀な論文選考をしていただきます、選考委員の諸先生に篤くお礼申し上げます。

また、厳しい国の金融政策の中で、本財団の研究助成金授与が滞りなく出来ますことは、財団の担当理事の並々ならぬご尽力のお陰でありまして、この席を借りお礼申し上げます。

毎年優れた数多い論文を提出して下さいます各大学及び担当の方々にもお礼申し上げます。今後とも一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に本日授賞者の皆様に重ねてお喜びを申し上げ大変簡単でございますが挨拶いたします。

平成 21 年度の研究助成候補者の選考について



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

平成 21 年度研究助成金の受賞者を選定する選考審査会は、平成 21 年 12 月 19 日(土) に開催された。審査委員長は、同席された佐伯理事長のご指名により、橋場理事が担当した。公募に応じられたのは 17 名で、ここ数年間では最も多い人数である。研究機関別では、九州大学 9 名、久留米大学 6 名、福岡大学 2 名でいずれも医学関係の学部或いは研究機関からの応募であった。

今回の応募された研究の内容は、大まかに分類すると腫瘍関連 5 件、感染症関係 4 件、再生医療関係 2 件、免疫代謝関係 5 件、医療技術関係 1 件となる。研究方法としては遺伝子工学、免疫細胞の解析、遺伝子組み換え動物の利用など最先端の技術が活用されている研究であった。今年の特徴として、フィールド調査の研究への助成申請が数件あったことである。

審査資料となる各応募者の提出された申請書は、選考審査会開催の 2 ヶ月ほど前に選考委員全員に配布されているので、各委員は事前にその資料を基に各候補者の研究内容を十分に検討し審査会議に臨まれたこととなる。

会議ではまず各委員が、各自の審査の結果を ABC の表示で候補者毎に示した後に、申請研究について一つずつ、その内容の検討を行った。主な注目点は、研究課題の独創性、重要性、その研究を実施する技術の有無、材料方法の独創性、などである。その判定には、申請書に記載された事のみならず、添付された自著論文の内容、留学経験があればそこの研究の内容なども参考にした。最終候補者を選定するまでに十分な時間をかけ議論し意見の一致を見る結果を得て、受賞者の選定をすることが出来た。今回の受賞者として江上拓哉、大川恭行、伊藤浩司の 3 氏(申請順)を選出した。以下その研究内容を紹介する。

江上氏のテーマは、「ウイルスの効率的細胞内導入を応用した新規癌細胞特異的 DDS の開発」で、癌の治療に使われている薬剤を効率よく癌細胞に導入する新しい方法を開発する研究である。これまでこの薬物導入に使われていたアデノウイルスを使う方法は、導入効率が必ずしも高くなく、アレルギーなどの副作用も考えられる。これに代わる物として、細菌の一種ではあるが、病原細菌とは異なる古細菌 (Archeae) と呼ばれる細菌が持つ heat shock タンパクに注目し、これを利用するという新しい方法を開発する研究である。申請者は、これまでに多くのアデノウイルスを用いた癌の治療を経験しておられ、その経験に基づいて

創出された研究であろうと考える。特に発見・治療の難しい膵臓癌への応用にはその成果が期待される。

大川氏の申請課題は、「高次クロマチン構造変換による幹細胞分化制御の解明」で、再生医療で注目を浴びている iPS 細胞に関する研究である。臓器組織の再生機構での重要なのは、幹細胞が特定の器官臓器へ分化していく機構である。本研究は筋肉組織を用い、この機構を遺伝子レベルで解明しようとする意欲的な研究である。研究の遂行にはかなり困難が予想されるが、外国留学で本研究と関連が深い筋肉の発生に関する論文を発表しているなど多くの研究実績があり、研究技術面でもこの困難な研究を遂行するだけの能力があると考えられ、その成果に期待した。

伊藤氏は、うつ病と関連があると疫学的には示唆されている心不全の関係を明らかにしようとする研究で、「シグマ受容体の自律神経調節における役割解明と「心不全→うつ疾患」の関連検討」という課題である。その主たる着眼点は、この両者の関連を脳内に発現するシグマ受容体に注目して解明しようとするものである。実験系としては、心不全モデルをマウスに作り、さらにこのマウスに実験的なうつ状態を作り、心不全の重症度との関連、脳内のシグマ受容体の動作等を薬理学的生理学的手法により解析する。これによりこれまでの疫学的調査での結果を科学的基礎を持って証明しようとする研究である。解明されればうつ病の予防、心不全に対する対策などに大きく貢献すると考える。

今回受賞者として選ばれなかった研究にも優れた研究が多くあり、受賞研究とは殆ど紙一重の評価の研究も幾つかあった。定員がある助成金の選考では、このことは何時も見られることであり、選考委員も我慢しなければならないところであろう。選に漏れられた方々も、否定的にはお考えにならないように願いたいもので、受賞者を含め、更なる研究の発展に邁進されることを期待します。

「研究助成の御受賞を祝して」



財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

選考の過程については、天児先生からお話のあった通りですが、17名の応募者の中から先生方が選ばれて受賞されたわけで、心よりお喜び申し上げます。最近では10名ないし12名程度の応募の年が多かったのですが、今回は17名の方からの優れた研究課題による応募があり、選考委員の一人として喜ばしく感じております。先生方の研究の今後のご発展を期待しております。

この受賞祝賀会では毎年のように申し上げていることですが、貝原守一先生の遺稿集である「医学と科学精神」を財団から今日ここで先生方に差し上げてあると思いますので、これを手にとられて、貝原守一先生のお名前によって研究助成を受けられたことの意義を少しでもお感じになって頂きたいものと思います。33才で戦死された先生の、研究者としての素晴らしさ、教養深い人間的魅力に教えられるものが多くありますし、本書の巻頭の、研究室でのお写真を見られるだけでも、貝原先生が語りかけて来られるものを、何か感じられると思います。

もう一つ、是非お願いしたいことですが、今回の応募課題に関係した論文を学術雑誌に掲載される場合には、論文の後記に、本財団からの研究助成を受けられたことを記載して頂きたいことと、その別冊を財団宛てに必ずお送り頂きたいことです。これまでの受賞者から送られているこのような研究論文の別冊は、財団の単なる記録に止まらず、財団の財産ともいえるべきものでありますので、このことは是非ご記憶になり、実行して頂くようお願いする次第です。

助成選考にあたって

選考委員・福岡大学名誉教授 小野 順子



今年度の応募は17件と近年では最多でありました。癌、発生、分化に関するテーマの比率が多いのは例年通りでしたが、その他多岐にわたる分野から応募があり、選考に苦慮すると同時に、本財団についてのご理解が広まったものと嬉しく思いました。

年々研究手法が高度化し、一定の期間を想定して成果を求められるような状況にあって、基礎的研究の速度が非常に速くなっていることに驚嘆しています。

また、特定な集団を対象にした臨床研究や調査研究の応募は、エビデンスに基づいた診療体系の浸透を窺わせるものでした。

受賞された3件のうち、再生医療の臨床応用を目指した分化誘導の研究は、その独自性と着実な手法により一致して高い評価が得られました。

また未だ治療成績が振るわない癌に対する薬剤到達システムの開発は、これまで積み重ねられてきた研究が集大成される期待を持たせるものでした。また、近年中枢神経が疾患の制御に関係することが明らかにされつつあり、この分野の研究の成果は種々な疾患に新たな側面を付加することと思われました。

臨床研究は地道であり、評価が難しい面があるため、独自の判定が望ましいかとも思いました。

助成対象となられた3件以外にも、優れた評価を受けた研究が続いており、その差は紙一重でした。是非ご研究を発展され、次なる応募に繋いで頂くようお願いいたします。

平成21年度 研究助成金授与者

(敬称略)

| 授与者 | 所属機関 | 対象研究テーマ |
|----------------------|---------------------------------------|--|
| 江上 拓哉 (エガミ タクヤ) | 九州大学大学院 医学研究院 臨床・腫瘍外科 共同研究員 | ウイルスの効率的細胞内導入を 応用した新規癌細胞特異的 DDS の開発 |
| 大川 恭行 (オオカワ ヤスユキ) | 九州大学医学研究院 SSP エピジェネティクス分野 特任准教授 | 高次クロマチン構造変換による 幹細胞分子制御の解明 |
| 伊藤 浩司 (イトウ コウジ) | 九州大学大学院 医学研究院 循環器内科学 非常勤研究員 | シグマ受容体の自律神経調節に おける役割解明と[心不全・シグマ 受容体機能不全・うつ罹患]の関連 検討 |

※今年度の研究論文募集について

平成22年度の研究助成論文募集は6月下旬頃に各大学宛に応募要領、申請申込書をご案内いたします。



平成21年度研究助成金受賞者

ウイルスの効率的細胞内導入を応用した新規癌細胞特異的 DDS の開発



九州大学大学院医学研究院 臨床・腫瘍外科
江上 拓哉

膵癌は根治が困難であり、これまで唯一の根治療法とされてきた手術療法の成績も未だ不十分である。そのため放射線や抗癌剤による集学的治療が試みられているが、多くは治療抵抗性を示す。近年、膵癌の分子生物学的研究が進み、新規治療薬の開発が多くなされているが、それを効果的に伝達、発現する理想的な Drug Delivery System (DDS) がなく、治療薬は期待されたほど効果が得られていない。DDS の中ではアデノウイルスベクターの細胞内導入効率が非常に優れていると報告されており、我々もアデノウイルスベクターによる分子生物学的治療の可能性を追求してきた。しかし、アデノウイルスは細胞選択性や感染に起因する免疫応答など未解決の問題が多い。そこで、ウイルスに代わる新規 DDS として人工ウイルスを作成し、膵癌細胞に対して効率的に癌細胞に導入する方法を開発することを目的とした。

これまで我々は HGF アンタゴニストである NK4 をアデノウイルスベクターを用いて投与すると膵癌の浸潤や局所再発が抑制されることを示し、抗癌剤や放射線との併用で膵癌へのウイルス導入効率が増強することを報告してきた。また、その際にはアデノウイルスの細胞内移行に関与する dynamin 2 や複数の endocytosis に関わる因子がウイルスの導入に重要な役割を担っていることを明らかにした。

そこで新たな可能性として、副作用の少ない新規 DDS として古細菌由来 heat shock protein (Mj285) を用いたナノカプセルに膵癌特異的に発現する MUC family などの表面化一カーを認識する抗体を付加して、癌細胞に特異的に侵入・崩壊し薬剤を放出する人工ウイルスの開発し、人工ウイルスに膵癌の第一選択薬 Gemcitabine を内包し、それを用いた膵癌標準治療に取り組んでいく。

高次クロマチン構造変換による幹細胞分化制御の解明



九州大学医学研究院 SSP エピジェネティクス分野
大川 恭行

人工的に誘導される多能性幹細胞の発見は、再生医療の可能性の幅を飛躍的に広げることに成功した。しかしながら、分化メカニズムを解明しさらに応用につなげるためには、特定組織に分化を誘導するシステムの確立が必要である。我々はこの解析のために、分化を誘導するための遺伝子がいかに活性化されるかという原点に立ち返って研究を進めている。

細胞内の個々の遺伝子が発現するには、1) ヒストンの修飾 (アセチル化、メチル化)、2) プロモーター・エンハンサー領域上のクロマチン構造の開放 (クロマチンリモデリング)、3) プロモーター・エンハンサー領域への転写因子の結合 4) 転写開始、それぞれにいたるステップを段階的に経ることが必要である。我々は、骨格筋分化において、これらのイベントが特定遺伝子のみならず、複数のグループ遺伝子ごとに、まとまって各段階ごとに同調的に制御されていることを見出した。つまり、個々の遺伝子がグループとして制御される**高次制御システム**が骨格筋分化において存在していることをあきらかにした。

しかしながら、この高次制御システムのメカニズムや関与する分子は不明なままである。我々は、高次制御システムが、核内での遺伝子座の再配置、つまりジーンクラスタリング (遺伝子集積) ではないかと考えアプローチを試みてきた。遺伝子集積現象の解析は、本領域で *kissing chromosome* とも言われここ数年で極めて活発な研究が行われている。我々は、骨格筋分化においてジーンクラスタリングによる遺伝子座の集積が、骨格筋分化における遺伝子発現において、ヒストンの修飾や局所的なクロマチン構造変換の以前に起こることを見出した。つまり、ジーンクラスタリングは骨格筋分化における最も初期の遺伝子発現制御機構ではある可能性が考えられることから、この現象をたどることで骨格筋分化制御の未知の高次制御システムの解明が期待できる。

そこで、我々は既に酵母の解析系で開発された遺伝子座の高次構造を検出する分子生物学的な解析法 (**Capturing Chromatin Conformation: 3C**) を用いることで体系的な遺伝子集積の解析が可能にする上で適した方法と考え、哺乳類細胞での高効率な遺伝子集積検出法の開発に、成功した。本研究により、骨格筋分化の各段階における遺伝子集積に必要な分子の同定が期待されるため、分化研究における遺伝子集積形成の解析のモデル系となるべく解析を行った。また現在までに得られた知見は単に、骨格筋分化という枠組みに囚われず、生体内でのあらゆる細胞分化現象を伴う幹細胞研究の応用に有効であると考えている。従来なされてきた、局所的な個々の分化特異的な遺伝子発現の理解にとどまらず、大局的な分化現象の把握が可能になり、いままでにない遺伝子集積現象に基づいたアプローチで、それぞれの分化系に関わる因子の同定につながることが予想される。現在までの転写制御の解析にさらに、大きな視点を与えるプロジェクトであることを期待し、今後も解析をさらに進めたい。

シグマ受容体の自律神経調節における役割解明と「心不全→うつ罹患」の関連検討



九州大学大学院医学研究院 循環器内科学
伊藤 浩司

心不全は現在でも5年生存率が40%台と依然予後不良の疾患であり、如何に心不全予後を改善させるかは緊急の課題である。これまで多くの疫学研究で「心不全患者におけるうつ病罹患率が高い」、「うつ病合併心不全患者の予後が悪い」ことが示されているが、その機序は不明である。両者はともに自律神経調節異常を呈することから、共通する機序の存在が示唆される。本研究は、心不全とうつ病を自律神経調節異常症という共通概念でとらえて、これらの疾患の関係解明と有効な治療法の確立を目指すものである。

本研究では、上記機序として脳内シグマ受容体に着目する。シグマ受容体は、近年その抗うつ作用や神経保護作用で精神神経科学領域において注目されている受容体である。実際に、うつ病患者で脳内シグマ受容体の減少が指摘されている。細胞レベルでは、シグマ受容体はグルタミン酸受容体活性制御等により神経活動性を調節していると考えられている。申請者はこれまで、高血圧や心不全における脳内自律神経調節異常とグルタミン酸受容体感受性変化の関連を中心に解明を行ってきたことから、本研究の着想に至ったものであり、すでに予備実験で、心不全マウスにおいて脳内シグマ受容体発現が心機能の低下に伴い減少すること、また脳内シグマ受容体 agonist 投与による交感神経活動抑制効果を確認している。これら予備実験の結果は、心不全モデルにおいて脳内シグマ受容体経路の機能不全が生じていることを示唆するものである。本研究は、これまでの知見や予備実験の結果を踏まえて、心不全モデルにおける[心不全↔シグマ受容体機能不全↔うつ病]の関係を系統的に明らかにし、心不全に対する新たな治療アプローチの提唱を目指すものである。

平成21年度 貝原守一賞 受賞者

貝原守一賞受賞者は下記のように決定し、平成21年10月3日開催の第69回青藍会（九州大学大学院医学研究院細菌学分野同門会）集談会において授与されました。受賞者の氏名、論文とその内容は以下に記す通りです。

平成21年度受賞者名（敬称略）

- ・松田 史子（博士課程を修了し、現在、山口大学大学院医学系研究科 ゲノム・機能分子解析学分野）

論文題名

Autophagy induced by 2-deoxy-D-glucose suppresses intracellular multiplication of *Legionella pneumophila* in A/J mouse macrophages.

掲載雑誌

Autophagy 5(4):484-493, 2009

内 容

2-deoxy-D-glucose をマクロファージに作用させると *L. pneumophila* の細胞内増殖が抑制されることを、産業医大・小川みどりらが報告していた。その機序を解析し、不完全なオートファジーは *L. pneumophila* の細胞内増殖を許すが、2-deoxy-D-glucose はオートファジーを促進することにより *L. pneumophila* の細胞内増殖を抑制していることを明らかにした。

-
- ・野本 摩利（産業医科大学 微生物）

論文題名

A host-vector system for molecular study of the intracellular growth of *Mycobacterium tuberculosis* in phagocytic cells.

掲載雑誌

Microbiology and Immunology 53:550-558, 2009

内 容

結核菌の病原性とくに細胞内増殖の研究は増殖が遅いため時間がかかり観察も解析も難しいが、迅速発育菌である *M. smegmatis* とそのベクター系を確立し、遅発育菌の病原遺伝子の解析を可能にした。

貝原守一賞について

（青藍会）は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、奥様の芳子氏（初代理事長）が故人の遺志を継いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室より研究奨励賞をと申し出であり、青藍会貝原守一賞として平成4年に発足した。

財団の主な事業報告

(1) 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|--------------------|------------------|---|
| 第一回 平成21年6月13日 | NTT・IT プラザ | 1、平成21年度事業計画並びに収支 予算案及び役員改選の件 2、その他 |
| 第二回 平成21年10月25日 | 財団事務局 | 移行申請書の内容変更の承認 |
| 第三回 平成21年12月5日 | 財団事務局 | 移行申請に伴う移行後の事業計画の 変更の承認 |
| 第四回 平成22年2月13日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | 助成事業の概況説明 |
| 第五回 平成22年3月6日 | 財団事務局 | 理事及び監事の選任 |

(2) 評議員選考委員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|-----------|-------|---------|
| 平成22年3月1日 | 財団事務局 | 新評議員の選考 |

(3) 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|--------------------|------------------|---|
| 第一回 平成21年6月13日 | NTT・IT プラザ | (1) 平成20年度事業報告の件 (2) 平成20年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成21年度事業計画の件 (4) 平成21年度収支予算の件 (5) その他 |
| 第二回 平成21年10月25日 | 財団事務局 | 移行申請書の内容変更の承認 |
| 第三回 平成21年12月5日 | 財団事務局 | 移行申請に伴う移行後の事業計画の変 更の承認 |
| 第四回 平成22年2月13日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | 今年度の助成事業概況について |
| 第五回 平成22年3月6日 | 財団事務局 | 理事互選による代表理事(理事長)選出 副理事長、専務理事任命の承認 |

(4) 助成事業

| 年 月 日 | 行 事 |
|-------------|---|
| 平成21年10月3日 | 貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会 同門会の研究者に助成 |
| 平成21年6月13日 | 平成21年度 研究助成論文応募要領送付 産業医科大、九州大学医学部、福岡大学医学部、福岡歯科大学 久留米大学医学部、九州がんセンター、九州歯科大学 |
| 平成21年12月19日 | 平成21年度助成金授与論文選考委員会 (於：福岡ガーデンパレスホテル) |
| 平成22年2月13日 | 平成21年度助成金授与式開催 (於：福岡ガーデンパレスホテル) 授与者3名 |

(5) 会報発行

| 年 月 日 | 行 事 |
|-----------|------------------------|
| 平成21年6月5日 | 貝原守一医学振興財団会報 (第13号) 発行 |



【贈呈式の祝賀会】



公益法人制度改正に伴う一般財団法人への移行について



一般財団法人貝原守一医学振興財団
専務理事 結城 慎也

平成22年を迎えた今年には当財団にとっては大きな転換点であります。

平成3年3月に医学の振興に役立てるという目的で、創設者が私財を投じて財団法人貝原守一医学振興財団として誕生し、今年で20年を経過することになりました。

平成20年12月1日から施行された公益法人制度改正関連法により、従来の財団法人は、5年以内に公益財団法人又は一般財団法人に移行が義務付けられ、これに対応するため、当財団では役員一同が将来の展望を熟慮し協議した結果、一般財団法人に移行することを選択し、特別委員会を設置して移行の準備を進めて参りました。

平成22年3月には、福岡県より一般財団法人の認可を得て新法人として生まれ変わり、医学及び医療に関する施設及び研究に対する援助を果たすという目的を遂行すべき、より一層充実した事業実施計画を策定いたしました。

この法人の生まれ変わりにより助成事業では医学を志す研究者に対する助成額を従来より1件200万円と増額させ、また、助成対象人員におきましても約4名程度と増員する年間計画を立案しています。

医学の研究関係機関への助成額も増額する計画で、財団が医学の健全な発展及び医療の向上に少しでも貢献できるよう取り組んで参ります。

今後も代表理事を始め役員全員で人類の幸福に寄与することを目的とした創設者の遺志を引き継ぎ、皆様の付託に応えられるよう一丸となり財団の運営に精励し努力して参る所存でございます。

関係各位におかれましても、今後より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



昭和17年（1942）31歳

戦争と醫學

貝原守一

醫師が部隊専属の軍醫として従軍するやうな軍醫制度はローマ時代になって充分發達したものであり、アウグスツス帝の時には衛戍病院が開設され、マウリテウス帝の頃には、スクリポーンネスと云われる騎乗の衛生隊が戰場を馳驅して負傷者を救療した事實が見られる。

しかし、更に古くは戦友相互が治療を施し合ひ、或は又充分に醫術の心得ある者が戦士であり又醫師として従軍し、或は戦ひ、或は創を洗ひ、止血し繃帶しイリアス物語りに述べられてゐるとほり、既に解剖學的に正しい系統的な軍陣醫學外科學を形造つてゐたことが知られてゐる。この事實から既にこの時代は敵屍體を用ひて解剖が行はれただらうといふことが、ケルネルによつて指摘されて居り、アレキサンドリア醫學に源を發すると考へられてゐる解剖學が遠く最古のギリシヤ醫學の時代まで遡り得ることが想像されるのは興味が多い。

中世期は科學の暗黒時代であり醫學も全く沈滞した。

勿論王侯が軍を進めるに方つては内科醫或るは外科醫（床屋外科醫）が従軍したと考へられるが、それすらも充分でなかつたやうだ。そして繰返された幾多の戦争と、損はれた數多くの戦士にも拘らず、醫學はそのためにも聊かの進歩をなしたとも考へられない。ただ然し、數度に亘る十字軍の影響を蒙つて、東西處々に次第に多數の病院や救護所―もつとも名だけで内部の施設は何等見るべきものはなかつた―が設けられ、ヨハネ騎士團、ドイツ騎士團、ラツアロ騎士團等の救護團體の活動が旺つた。なつて近代の病院衛生施設の先驅をなしたことは大きな收穫だつたとも考へられよう。

九大新聞 昭和十三年十一月五日発行

前号に引続き「戦争と医学」（四回連載のうち第二回目）を掲載します。

昭和十三年当時の九大新聞からの転載にあたり漢字及びかなづかいは出来る限り原文に忠実に掲載しました。

公益法人制度改革関連法施行に伴う 法人名変更のお知らせ

平成20年12月1日より「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」が施行され、当財団も法律に定められた所定の手続きを経て、平成22年3月19日付けで移行認可を得、平成22年3月25日に一般財団法人へ移行しましたので下記の通りお知らせ致します。

今事業年度から、新しい法人体系でスタート致しますが、関係各位におかれましては今後とも相変わりがせぬ一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

一般財団法人員原守一医学振興財団
理事長 佐伯 清美

記

新法人の名称

当財団の法人名は、平成22年3月25日より

「一般財団法人員原守一医学振興財団」となりました。

以上

貝原守一医学振興財団
会報 第14号
2010年6月 発行

発行：一般財団法人貝原守一医学振興財団

事務局：〒811-1343 福岡県福岡市南区和田1-4-18

TEL: 092-512-8068 FAX: 092-512-8069

URL <http://www.kaibara-zaidan.or.jp>

E-Mail Info@kaibara-zaidan.or.jp